

耳の衰え

長光寺住職 福島伸悦

毎年人間ドックを受けていますが、項目の一つに聴力テストがあります。狭い防音室に入り、ヘッドフォンをして、音が聞こえたときにボタンを押すというものです。一般的に人間は、20 ヘルツから 20,000 ヘルツの音を聞き分けることができるのですが、年とともに聴力が衰えていくような気がします。知り合いのお年寄りの中にも耳が遠い人がおられますが、コミュニケーションが取れないので、だんだん人との接触がなくなり孤独を感じるといいます。

音が聞こえない、または聞こえにくい状態を「聴覚障がい」と言うそうですが、障がいの原因や程度の「差」、聞こえ方の「違い」によって個人差があって、ひとくくりにはできないということです。聞こえないからと言って大きな声で話しかけると逆効果で、本人は雑音になってしまうそうです。

もう亡くなった母ですが、晩年、高価な補聴器をつけていましたが、最初のうちだけですぐに外してしまい、ケースに入ったままでした。何度も「装着しなければダメでしょう」と言っても、聞こえているのかどうかわかりませんが、いつもニコニコしてうなずいているだけでした。今思い返してみると、母の気持ちを察してダメ出しなどしなければよかったと反省しています。

まわりを見回してみると、私と同じようなことをやっている人が多いのに気づかされます。特に親子の関係の場合です。コミュニケーションが取れないのは、補聴器をしていないからだや決めつけてしまっているからです。円滑なコミュニケーションを図るためには、相手の立場に立って優しく接し、「筆談」などの手段を用いるか、あるいは聞こえるかどうかを確認すればよいだけのことです。

いずれは我が身、気を付けたいものです。